

たか うす じょう あと
高腰城跡



たか うす じょう あと
ひ が しゅうらく きた
高腰城跡は、比嘉集落の北にある高さ113mの丘陵の頂上
ぶ ぶん
部分につくられた13~14世紀頃の城跡です。

『雍正旧記(1727)』には、この城の城主が高腰按司であった
ことや、城の大きさなどが明記されています。発掘調査に
よって13~15世紀の土器や陶磁器、
古銭、鉄製品などが確認されています。現在は、石積みの一部が残るのみ
です。



たか うす あ じ
高腰の按司

むかし、高腰按司は、城の南にある城はら中喜屋泊村の内立按司、城の東にある新腰村の新腰按司と同盟関係にあり、ともに協力しあってこの地域一帯をおさめていました。

ところが、当時、東川根に拠点をもち、宮古全土に勢力を拡大していた与那霸ばらの軍勢が、内立按司をそそのかし、城を奪う計画を立てます。

内立按司が高腰按司を一年の収穫を感謝する祝宴と称して自分の城に招き、その祝宴の最中に与那霸ばらの軍勢が按司のいない高腰城を攻めました。

城からの早馬で事の次第を知った高腰按司は急いで戻りますが、時すでに遅く、城は焼け落ちた後でした。それを目の当たりにした按司は、高腰御獄で自害したと伝えられています。

参考：『宮古史伝』慶世村恒任著



□ 県指定史跡範囲 □ 高腰城跡 遺跡範囲

ひがし
比嘉の獅子舞

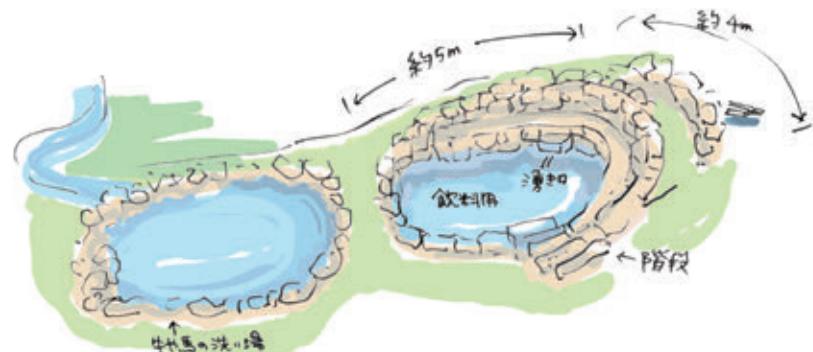


比嘉集落では、旧暦の1月20日に二十日正月という祭事が
とり行われ、その中で地域の安全や五穀豊穣、繁栄を祈願し
て獅子舞が奉納されます。1908(明治41)年、集落所有の土地
を巡って士族と平民が争い、裁判沙汰にまで発展します。

比嘉の将来を憂慮した双方が歩み寄つ
て和解し、1912(大正2)年の旧暦1月
20日に盛大に祝ったことが始まりだと
いわれています。



ぬがながー
野加那泉



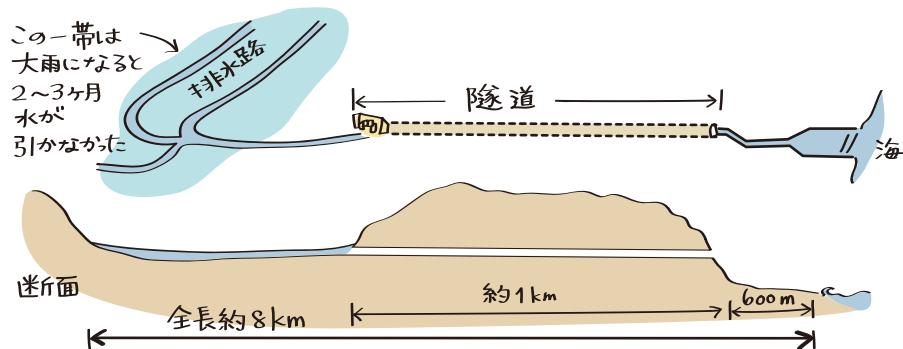
野加那泉は比嘉集落の西側にある湧泉です。井戸は二段構
えで、北側は飲料水、南側は牛や馬を洗う場所として利用さ
れ、使用後の水は水田の用水にも使用されていました。この
一帯にはイヌ原里という集落があったとされますが、詳しく
はわかっていません。昔は、夕方になると若者たちが泉に集まり、水汲みに
来た女性に声をかけたり、日々のこと
を話すのが何よりの楽しみでした。



すい ふく すい どう
瑞福隧道



排水路が広がる比嘉下の島、池原底、福地原、加治道一帯は大雨のたびに水が溜まり、農作物に大きな被害を与えていました。1933(昭和8)年、当時の瑞慶覧朝牛村長は地主400名余りを集めて大規模な排水工事にとりかかります。4年後、全長約8kmの排水路が完成。丘陵をつらぬく約1kmのトンネルは、瑞慶覧村長の功績を讃え、瑞の一文字をとって「瑞福隧道」と名付けられました。



排水路の改修と新トンネル

瑞福隧道の完成から40年余りの歳月が経ち、隧道の老朽化が進んだため、県は排水路の改修と、トンネル新設工事に取りかかります。現在行っている耕地などの整備で、排水量が増えることが予測されたため、瑞福隧道は改修せず、その東側に新しいトンネルを掘る大工事となりました。1984(昭和59)年に着工し、2000(平成12)年に、排水路と新トンネルが完成しました。



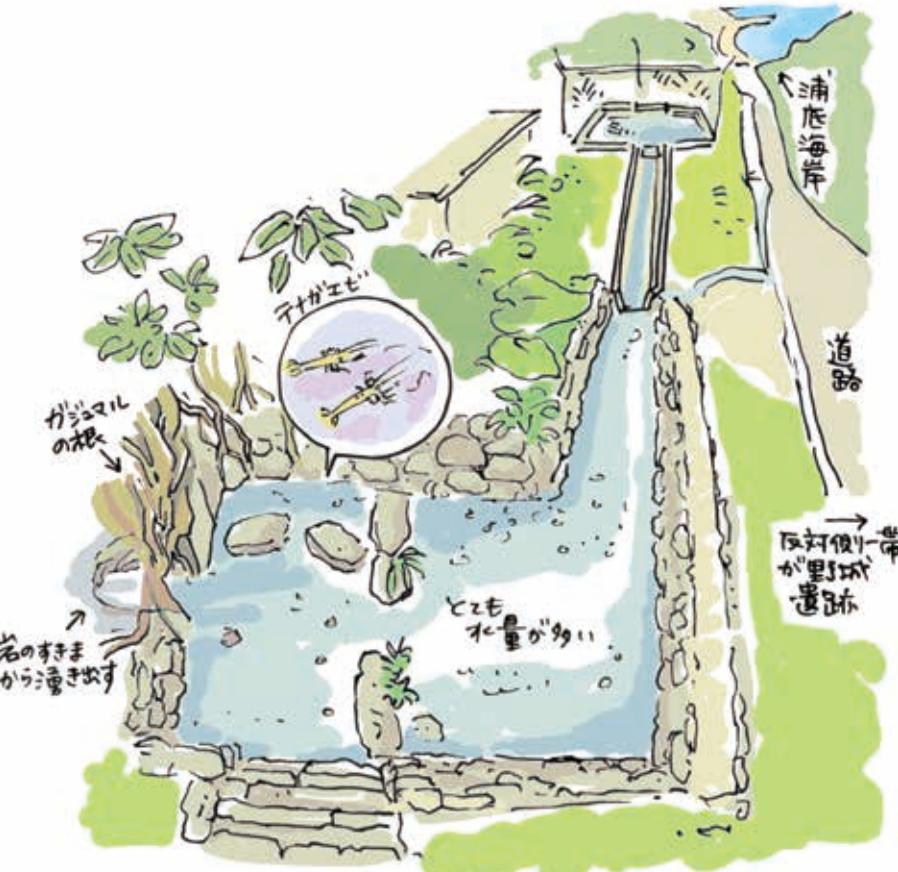
直径5mで、ダンプ1台がゆうに通れる大きさの新トンネルが瑞福隧道と並行して走る

野城泉

1991(平成3)年4月9日指定



ぬぐすくがー うらそこぎょこう お とちゅう ひょうこう
野城泉は、浦底漁港に降りていく途中の標高60mほどのと
わだしせんゆうすい たいめん きゅうりょう い ち い
ころに湧き出す自然湧水です。対面の丘陵に位置する野城遺
せきかか あじしゅうだん のみず
跡に関わりがあるとされる野城按司の集団が、飲み水として
りよう かんが すいりょう ほうふ げんざい
利用していたと考えられています。水量が豊富で、現在でも
ふきん のうぎょうようすい
付近の農業用水として利用されています。また、1995(平成7)年にシマチスジノリの変種「ミヤコチスジノリ」が
かくにん へんしゅ
確認されています。



ミヤコチスジノリ

ぬぐすくがー かくにん そう
1995年に野城がーで確認された藻
るい ちょうさ けっか こくない はじ
類は、調査の結果、国内で初めて確
認されたシマチスジノリの変種であ
ることがわかり、「ミヤコチスジノ
リ」と呼ばれています。

シマチスジノリは分布が非常に限
てい きょうしう ゆうすい いど
定された希少種で、湧水井戸という
とくしゅ かんきょう そだ
特殊な環境で育ちます。

ミヤコチスジノリは野城泉にのみ

せいそく きんねん かんきょう へん
生息していますが、近年は環境の変
かともな げんしょう 化に伴い、減少しています。



ミヤコチスジノリ (撮影: 藤田喜久)

浦底遺跡



出土した 200 本以上の貝斧

浦底遺跡は今から約2500～1800年前の無土器期の遺跡で、浦底漁港の南東側に位置する砂丘に形成されています。200本以上にのぼる世界最多のシャコ貝製の貝斧が出土し、他にも様々な貝や骨製品が出土しています。また、集石遺構(石が集められた跡)が160基以上確認されており、焼き石を使った調理法(アースオーブン)で料理をした跡だと考えられています。

い せき
アラフ遺跡

アラフ遺跡は今から約2,800年前の無土器期最古の遺跡で新城海岸の砂丘に形成されています。他の無土器期の遺跡と同じように、集石遺構や貝斧など多様な道具が出土しています。特に注目するのは、4本の貝斧と1本の枝サンゴがまとまって発見されたことで、何らかの祭祀儀礼に使われたと考えられています。これは世界的に例をみない発見となりました。



浦底遺跡やアラフ遺跡から出土した遺物

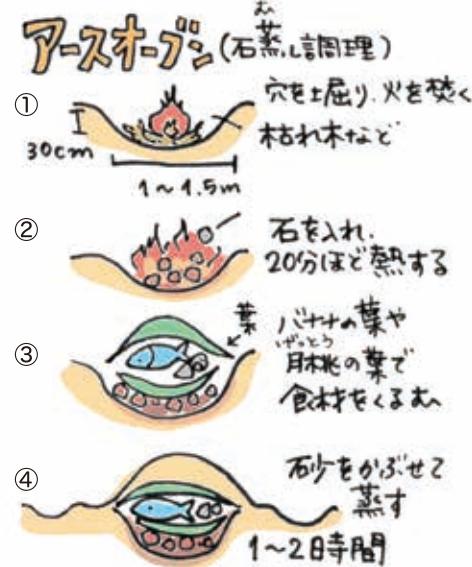
石で調理をしていた跡

浦底遺跡やアラフ遺跡からは、火を受けて黒く変色した石灰岩やサンゴ石灰石がまとまった状態で発見され、集石遺構といわれています。

これらの用途はアースオーブンやストーンボイリングといった、焼いた石を用いた調理跡だったと考えられています。



集められて焼かれた石の遺構がまとまって検出された(浦底遺跡)



貝斧(シャコガイの斧)

貝斧は無土器期を代表する道具で、大量に製作されています。貝の形を上手に利用して斧などに使用しています。

儀式に使われた!?

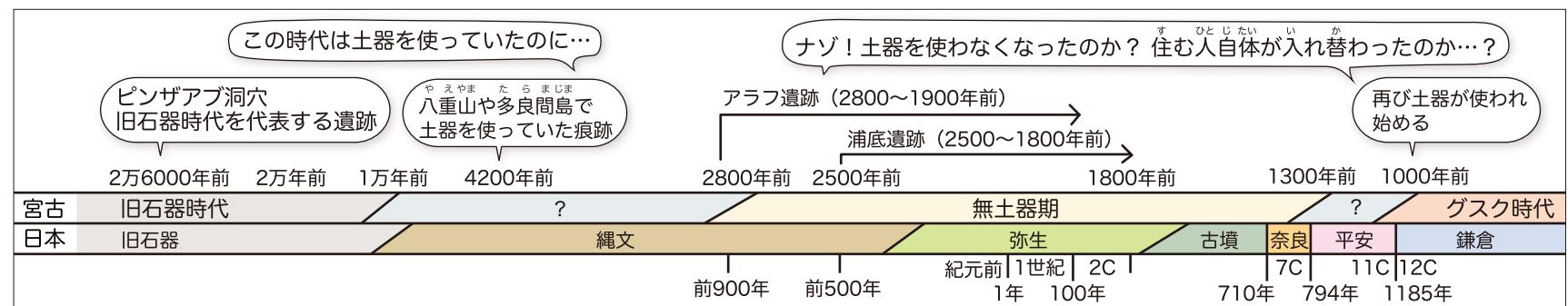
アラフ遺跡で発見された「貝斧埋納構」は、4つの用途の違う貝斧と1本の枝サンゴがひとつにまとめてあり、丸木舟をつくった後、大工道具の供養のため埋められたと考えられています。このような形での出土は他に例を見ません。



丁寧に並べられた4つの貝斧と枝サンゴ(アラフ遺跡)

むどきき 無土器期って?

土器が出土しない時代。土器を使わない代わりに貝や骨を道具として使っている。



保良元島遺跡



保良元島遺跡は、標高50~60mの台地に形成された14~15世紀頃の集落遺跡です。遺跡範囲は広く、元島御嶽やブンミヤー跡、竜の家と呼ばれる洞窟があります。中国の記録史『温州府史(1605)』によれば、1317年に中国の永嘉県に小船が漂着し、「我々は婆羅公に仕える密牙古人で、交易のために撤里即地面^{*}に往く途中で嵐にあった」と語ったとされています。婆羅は保良、密牙古は宮古と考えられ、保良の人々が南方と交易し、この元島が海外貿易の拠点だった可能性も残されています。*シンガポール方面といわれている



1994(平成6)年4月12日指定

保良元島の竜

むかし、保良の村人はとても豊かな暮らしをしていました。

ところが、ある日から鶏や山羊、馬、牛がいなくなるというようなことが毎日のように続きました。この奇妙なできごとに、村人たちちは「このままでは村はどうなってしまうのか」と心配し、総出で村中を探しまわりました。

すると、村人のひとりが村の近くにとても深い新しい洞窟があるのを見つけました。その洞窟を何気なく覗いてみると、蛇のような巨大な生き物が鼻をコロコロと鳴らして寝ていました。あまりのことに驚いてひっくり返り、気絶してしまいました。慌てふためいた村人们は、気絶した人を担いで逃げ帰りました。

それからというもの、村人们は、子(北)・丑(南)・寅(東)・辰中の4つの里に分かれ、順番に洞窟の生き物を見張りました。

ある日、その生き物が天に勢よくササーと登っていったかと思うと、雲の間からドドー！という

雷だか声だかわからない音とともに降りて来るのを目撃します。

もしかして…とさらに見張つていると、大嵐になり竜巻が起きたかと思ったとたん、その生き物と一緒に村の牛もいなくなっていました。

これを見た村人は、「やっぱりこいつが盗んでいたんだ！」と怒り、次の日の夜、生き物が寝ているを見はからい、洞窟に火を放って焼き殺してしまいました。

焼き殺した生き物をよく見ると、それは竜の子でした。するとドドーという音とともに天から親竜が降ってきて、我が子が死んでいるのを見て悲します。

村人はこの竜の親が元々の原因と考え、なんとかして退治しようと頑張りますが、殺すことはできなかったそうです。



周辺の遺跡群



宮古諸島では1981~82(昭和56~57)年にかけて沖縄県教育委員会による遺跡分布調査を実施し、表面踏査による調べで85か所もの遺跡が確認されています。また、近年の土地開発に伴い、新規の遺跡も数多く発見されています。

城辺一帯では主に海岸の砂丘地に立地する、無土器期といわれる土器を使わない時代の遺跡や、丘陵部に立地する13~15世紀頃の石積みを伴う遺跡などが分布しています。

また数多くの戦争遺跡も分布しています。

● 遺跡・城跡・遺物散布地
● 戦争遺跡

- ① ウズラ嶺の陣地壕群
- ② 西更竹司令部壕
- ③ 西花切の壕群
- ④ 旧西中共同製糖場煙突の弾痕
- ⑤ アーリヤマの戦争遺跡群
- ⑥ 東保茶根の戦争遺跡群
- ⑦ 与那浜崎の砲台
- ⑧ ツヅピカ御嶽の壕
- ⑨ 池原・久路布の壕群
- ⑩ ミルク嶺の地下壕群
- ⑪ 西川底の壕群
- ⑫ ツガマキ御嶽の壕
- ⑬ 南野加那の壕
- ⑭ 吉野海岸の壕
- ⑮ 東平安名崎の銃眼

リュウキュウキンバト

1972(昭和47)年5月15日指定

リュウキュウキンバトは、キンバト属の沖縄特産の亜種で、宮古島・西表島・石垣島・与那国島などに生息する熱帯系の美しい小バトです。近年生息域である原生林の伐採などによって減少傾向にあります。



写真提供：仲地 邦博

イイジマムシクイ

1975(昭和50)年6月26日指定

イイジマムシクイは日本固有の渡り鳥で、ウグイスと大きさも形もほぼ似ています。山林や低地の雑木林、竹やぶなどにすみ、旅鳥として沖縄島・宮古島・与那国島などに渡来した記録があります。



カラスバト

1971(昭和46)年5月19日指定

カラスバトは、沖縄北部・慶良間・宮古・八重山諸島の常緑広葉樹林に生息します。国内のハトでは最大で、宮古、八重山のものはヨナクニカラスバトとして別亜種になっています。目撃は極めて希です。



オカヤドカリ

1970(昭和45)年11月12日指定

沖縄県には6種類のオカヤドカリ属が分布しています。主に海岸や海岸林の近くに生息し、産卵のために陸にあがった後は陸上で生活します。

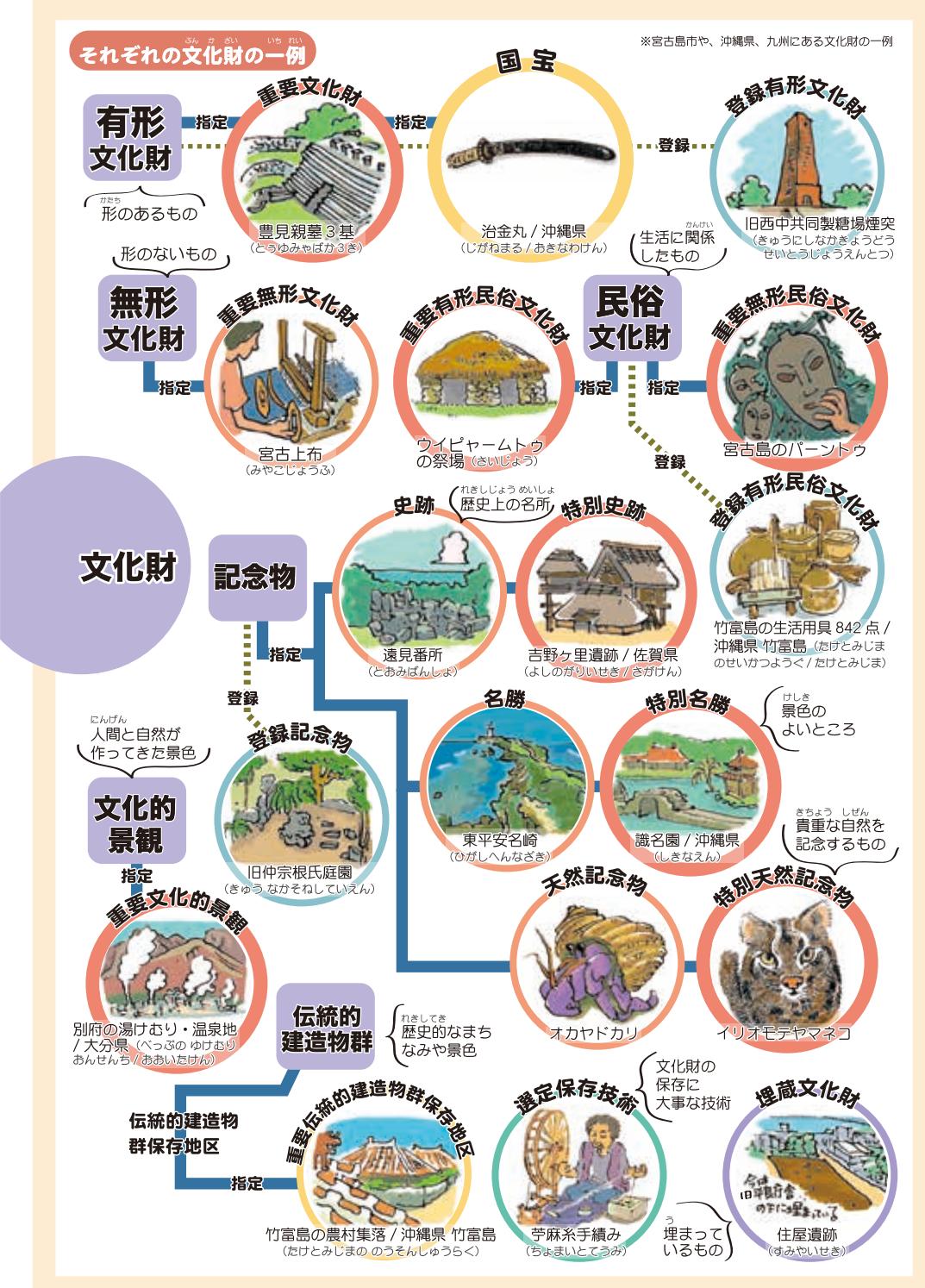
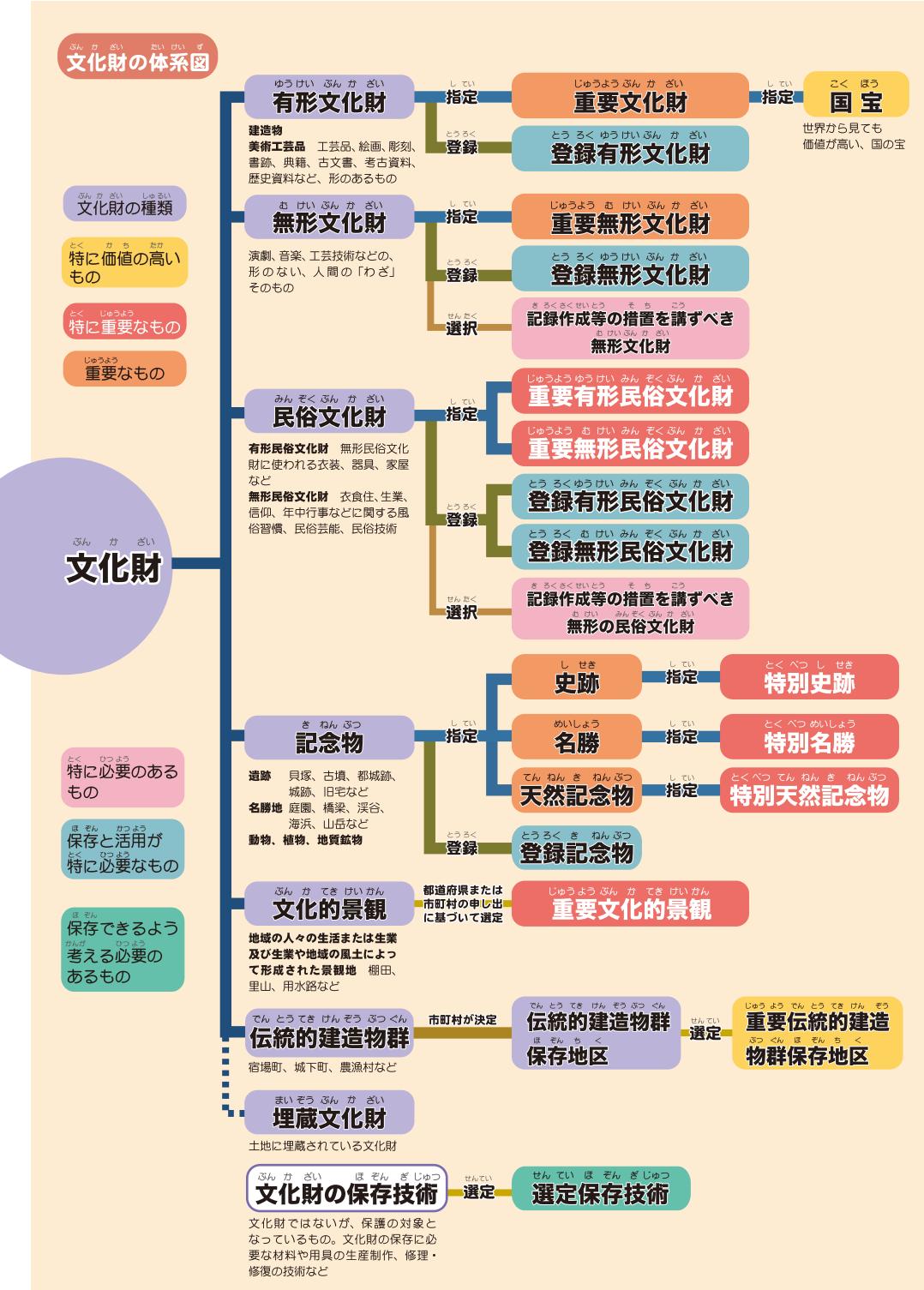
キシノウエトカゲ

1975(昭和50)年6月26日指定

キシノウエトカゲは宮古・八重山諸島に分布する固有種です。体長約40cmに達する日本固有のトカゲの中では最大です。

1960~70年代にネズミ駆除にイタチが導入されたため、激減しています。





わたし ぶんかざい
私たちの文化財です

たいせつ
大切にしましょう

ぶんかざい きょか むだん げんじょうへんこう
文化財を許可なく無断で現状変更する

ほうりつ きんし
ことは法律で禁止されています。



昔のことや、自然のこと、いろんな人の考え方など、
たくさんのこと教えてくれる大切なものです。

この冊子は非売品です (NOT FOR SALE)

宮古島市neo歴史文化ロード 綾道(城辺東・北コース)

発行 初版 2019(平成31)年 3月
改訂 2025(令和 7)年10月

編集・発行 宮古島市教育委員会
〒906-0103沖縄県宮古島市城辺字福里600番地
TEL 0980-77-4947 FAX 0980-77-4957

イラスト・デザイン 山田 光